

姫路におけるニューカマーの教育支援をデザインする

～保護者の支援及びキャリア教育の視点から～

環境人間学部 環境人間学科

准教授 ^{いぬい み き} 乾美紀、4回生

^{にしかわ ま ゆ} 西川真由、^{ほりこしりょう き} 堀越亮公

3回生 ◎^{うしろだにかりん}後谷花凜

キーワード

多文化共生 ニューカマー 定住外国人 保護者 キャリア教育

研究概要

現在、日本には多くのニューカマーが暮らしている。その中で文化・社会的背景を異にする移民やその子ども達に、いかにして適切な教育を保障し提供することができるかが重要な課題となっている。私達が所属する環境人間学部が位置する姫路市は、かつてインドシナ難民の定住促進センターがあったこともあり、ベトナム人やラオス人が住んでいるほか、現在では日系南米人や中国帰国者など多くのニューカマーが暮らしている。姫路市の在留外国人の数は10,419人で、兵庫県内においては5番目に高い数値である。乾ゼミでは、姫路市内で行われている地域や学校での教育支援活動に参加し、問題を自分達の身をもって感じてきた。問題としては、子ども達が保護者のサポートを受けにくいことや、自らの集団に将来のロールモデルを見出しにくいこと、さらにはニューカマーの子ども達は保護者の母語をあまり理解できていないということが挙げられる。

本研究の目的は、姫路におけるニューカマーの教育支援について、保護者の支援及びキャリア教育の視点から検討し、彼らへの支援の在り方をデザインすることである。研究方法は、ニューカマーの子ども達の学習支援教室での参与観察に加えて、教育支援者にインタビュー調査を行った。

アピールポイント

本研究のアピールポイントはニューカマーへの教育支援者にインタビューを行い、教育現場で直接支援者や子ども達と関わった上で、教育支援に向けたデザインを提言することである。

〈保護者へ向けた支援の必要性〉

ニューカマーの保護者は日本語能力が低いため、日本の複雑な教育システムを理解することが難しい。また子どもは保護者の母語を理解していない場合も多い。そのため、高校受験時に親子間のコミュニケーションが取りづらく、それが進学の際の障壁となっている。学校では保護者向けのお便りに翻訳をつけるなどの支援を行っているが、言語面や仕事面の関係から保護者が学校教育に積極的に参加する様子はほとんど見受けられないのが現状である。この現状を改善するためには、学校や行政が保護者に教育支援活動の周知を徹底させる、また教育専門用語を保護者の母語で表記したガイドブックを作成するなど、保護者が学校教育により参加しやすい環境をデザインしていくことが必要である。

〈ニューカマーの子ども達に向けたキャリア教育の必要性〉

ニューカマーの子ども達は、高等学校や専門学校、大学への進学を望んでいるが進学することが難しく、また就職を望んでいるがどのような仕事があるか分かっていないため、キャリア教育が必要だという現状がある。このような状況から、筆者らが参与観察を行った学習支援教室では、姫路市内にある世界で活躍する企業の見学を行う、高等学校や大学に通う先輩の話を聞く機会を設けるなど、小学生以上を対象に様々なロールモデルを示すためのキャリア教育が行われている。子ども達が将来のキャリアにおいて外国にルーツを持つことを強みとするためには、早期からロールモデルを示すことに加え、日本語と母語の2ヵ国語を両方使えるようにするなど、日本人とは異なるキャリア教育をデザインする必要がある。